(110)

氏名(生年月日)　外山聡彦（トヤマ アキヒコ）
本　　籍
学位の種類　博士（医学）
学位授与の番号　乙第2070号
学位授与の日付　平成13年3月16日
学位授与の要件　学位規則第4条第2項該当（博士の学位論文提出者）
学位論文題目　**Stanford B型解離に対する外科治療の遠隔成績と予後因子の検討**
論文審査委員　（主査）教授　小柳　仁
（副査）教授　小林　槇雄，澤口　彰子

論文内容の要旨

〔目的〕

手術手段や補助手技の改善に伴い胸部大動脈瘤の手術成績は向上し，合併症を含め，手術適応の拡大がなされている．しかし，解離性大動脈瘤では病変が広範囲にわたることが多く根治手術が難しいため，拡大部位の部分的な置換のみとなることが多い．したがって残存病変の遠隔期再発の問題があるが，その詳細な検討は少ない．

本研究ではStanford B型解離手術症例の遠隔調査により，遠隔成績に影響する因子を分析することにより予後改善のための対策を検討した．

〔対象および方法〕

1987年7月から1999年4月までに東京女子医科大学循環器外科で施行したStanford B型解離の外科治療施行例43例を対象とし，真性大動脈瘤の合併例や弓部病変を合併した症例は除外した．患者背景因子，合併症，手術関連因子を説明変数とし統計学的検討を行った．

〔結果〕

術後30日以内の手術死亡は3例(7.0%)，30日以後の病院死亡は1例（2.3%）であり，両者を合わせての早期死亡は4例であった．遠隔期死亡は生存退院39例中8例であり，1例は膀胱癌による癌死であり，その他は全て破裂による血管死であった．血管死を認めた7例は全て残存解離が存在していた．遠隔期死亡した患者の平均の退院時の残存瘤径はCT検査上40.3±6.1 mmであり，再手術症例を除いた生存症例では37.4±7.1 mmであった．Kaplan-Meier法を用いて計測した早期死を除いた実測生存率は5年で90%，10年で71%であり，全血管事故回避率は5年で81%，10年で62%であった．Cox比例ハザードモデルで解析すると，術後CTで計測した吻合部遠位の残存動脈瘤外径のみ全血管関連事故について有意差を認め(p=0.003)，残存瘤径については39 mm以下と40 mm以上で全血管関連事故発生について有意差を認めた（p=0.025）．

〔考察〕

Stanford B型解離に対する外科治療に関し，遠隔成績に影響するもっとも大きな因子は残存解離腔の破裂である．このことは残存瘤を残さない手術，または積極的に再手術を施行し瘤径の大きい部分を順次，置換していく必要性を示唆している．拡大手術は出血，手術時間の点からも自ずと限界が存在する．今回の結果からも40 mm以上の残存瘤の残らない時期の手術，また，マルファン症候群など遠隔期に瘤拡大による外科治療が予想される場合には，瘤が拡大傾向を示した時の早期の対応が遠隔期における破裂や再手術を避ける重要な点と思われた．これにより，胸部下行大動脈置換時に問題となる40 mm以上の残存瘤を残さない手術が可能になると思われ，そのような症例では肋間動脈再建も少数で終わり，対麻痺発生のリスクも少なくなると考えられた．

〔結論〕

Stanford B型解離の外科治療における遠隔予後を検討した．今回の結果より遠隔予後に影響するのは，残存瘤の存在であり，40 mm以上の残存瘤を残さないような手術時期および術式を検討することが重要と思われた．やむを得ず広範囲の胸腹部置換を必要とする症例では，可能であれば計画的な分割手術を行うことで，手術の危険が軽減し疾患の予後が改善するものと思われた．

論 文 審 査 の 要 旨

解離性大動脈瘤では病変が広範囲にわたることが多く根治手術が難しいため，拡大部位の部分的な置換のみとなることが多い．Stanford B 型解離手術症例の遠隔調査により，遠隔成績に影響する因子を分析し，予後改善のための対策を検討した．Stanford B 型解離の外科治療施行例 43 例を対象とし，真性大動脈瘤の合併症や弓部病変を合併した症例は除外した．患者背景因子，合併症，手術関連因子を説明変数とし統計学的検討を行った．遠隔期死亡した患者の平均退院時の残存瘤径は CT 検査上 40.3±6.1 mm であり，再手術症例を除いた生存症例では 37.4±7.1 mm であった．Cox 比例ハザードモデルで解析すると，術後 CT で計測した吻合部遠位の残存動脈瘤外径のみ全血管関連事故について有意差を認め (p=0.003)，残存瘤径の増大に伴い全血管関連事故がおこりやすい傾向を認めた．残存瘤径については 39 mm 以下と 40 mm 以上で全血管関連事故発生について有意差を認めた(p=0.025)．40 mm 以上の残存瘤を残さないような手術時期および術式を検討することが重要と思われた．

主論文公表誌

Stanford B 型解離に対する外科治療の遠隔成績と予後因子の検討
東京女子医科大学雑誌　第 70 巻　第 12 号　731-739 頁（平成 12 年 12 月 25 日発行）外山聡彦

副論文公表誌

1) 新しい外部灌流型人工肺 AFFINITY の臨床評価—MENOX AL-6000 との比較検討—．人工臓器 24(2): 562-564 (1995) 外山聡彦，渋谷益宏，西田博，八田光弘，鈴木　進，遠藤真弘，小柳　仁
2) 新しい血液濃縮器 LH-840 P の臨床評価．人工臓器　24(2): 584-586 (1995) 外山聡彦，西田　博，八田光弘，北村昌也，鈴木　進，遠藤真弘，橋本明政，小柳　仁
3) 経胸壁心臓超音波検査にて診断された冠動静脈瘻の 1 例．埼玉医会誌　32(7): 1073-1076 (1998) 外山聡彦，吉岡行雄，坂橋弘之，齋藤雅彦，星野泰宏